



みやざと 宮里 (ナーザトゥ)

宮里の今昔

宮里は、赤道十字路の東部にある江州城跡の北東部に位置し、当初は勝連間切に属していたが後、具志川間切となつた。具志川小唄の一節に「言葉ぬヤワラカサ宮里村」とあり、これはかつて勝連の領地だった頃のことばの名残りであろう。

『具志川市誌』に「宮里と表記されるようになったのは一七三七年一七五〇年の頃であろう」と記されているが、一七一三年にできた『琉球国由来記』にすでに具志川間切に宮里村が出ています。

文書に宮里らしき文字が表れてくるのは十五世紀中期以降の進貢船の使者の名前に「明察度」や「宮察度」が見える。

宮里出身の人物としては、間切三代日地頭代徳田与助、具志川間切初の県会議員として活躍し、後海外に雄飛した又吉倫祥、近年では教育者として知られる仲里嘉英(旧姓・又吉)などが

いる。

戦後赤道十字路の南東側には米軍の基地があつたが、返還後は住宅地として発展拡大してきた。また昭和四十八年の県立中部病院の建設により、赤道十字路を中心に各種の商店、金融機関、サービス業、飲食店などが建ち並び都市的景観を帯びている。

宮里地名を考える

地名には、同じ地名が各地に分布するが、このことは地名の語源や意味を調べる上で貴重な手がかりとなる。県内の宮里地名について調べてみると一、名護市の宮里

地名の語源について『角川・日本地名大辞典・沖縄県』は、「ナーザトは、ナト(湊)から転訛したものである」とある。現在の宮里は、海岸一帯の埋め立てによって内陸部に位置しているが、村の発祥地は名護湾にそそぐ屋部の川の東に位置する古湊と呼ばれるところであった。

二、沖縄市の宮里

越來城跡の東方に位置、地名の由来は御里から宮里に転訛したと伝えられるが、これはかつて越來城がこの地の中心であったことから「御里」といわれたと考えられる。その語源について『沖縄地名考』(宮城真治)から要約すると「宮里は高台にあつて港とは縁遠いように受け取れるが東方の低地帯に「ンジャトゥ田」という田圃があり、

古謝・桃原は古くは良い港であつたに違いない」として宮里の語源は港としている。

三、本市の宮里

本市の宮里地名について『具志川市誌』は、「宮里という名は美里、見里、宮里に移り変わっている。首都を表すに御里と呼ぶ、御が美に、美が見に、見が宮に代わつて現在は宮里と呼ぶ」。

また、高江洲中学校創立五十周年記念誌には「御里、見里、宮里になった。高い丘から里を見下ろすという意味になる」とある。

しかしこれらの説については宮里の歴史的な背景(首都説)や当時の下原の集落(里)の状況から疑問が残る。

宮里の語源は水門

先述の『沖縄地名考』で宮里の語源は「みなと」から「みだ」となり、「だ」が「じゃ」に変化して「みじゃ」となり、これが「見里」「美里」になり、ついに「宮里」と表記されるようになった。金武町億首川河口に金武観音寺を開いた日秀上人の上陸地として伝えられる富蔵港がある。この富蔵港はかつて地元では「フックワンジャトウ」と言った。このような例からミナトをンジャトゥと発音したことがわかる」と述べている。現在の宮里は高台に位置し、港と関係づけることは難しいが、古い記録『球陽』によれば、

水の便が悪いため一時期下原へ移動し、再びもとの地にかえつたという。

宮里の下原は江洲川が前原を流れており、当時は現在の前原の奥深くまで海が入り込み、江洲川の出口、つまり水門になっていたに違いない。港のもとの字は「水門」であり、川が海に出るところの意味で必ずしも船の出入りする「港」ではなかった。宮里の語源は「水門・ミナト」で、その意味は「川が海に出るところ」ということになる。

クーリブキ

具志川環状線宮里十字路の東南端に「クーリブキ」と呼ばれるところがある。「ブキ」はフケ系の地名で崖地や湿地を意味する。県外では徳島県の大歩危・小歩危が知られている。大股で歩いてても小股で歩いてても危険という意味で付けられたといわれるが、もとの意味はその地形、崖地から付けられたものである。沖縄では名護市の「世富慶」もこの系統の地名と考えられる。

宮里のクーリブキは、「壊れ」(クーリ)・「ブキ」(崖地)からきている。宮里出身の山城文盛の『生まれ島』の記にこのクーリブキの話がある。この一帯の崖は崩れやすく排水工事に難儀したことや崖付近に生えていた松がいつの間にか海岸近くまで移動していたことが記されている。